無題、2022、木、プラモデル、ソフトビニール、アクリル絵具、ステンレススチール
Set of 9 pieces 175 x 47 x 47 cm (sculpture : 85 x 47 x 47 cm),
photo by Kei Okano

プラモデルには「ジオラマ」というジャンルがある。
それを、ビンテージプラモデルと木彫を中心に、
自分の作品に取り入れてみた。— 加藤泉

次回展のご案内

加藤泉 — 寄生するプラモデル

IZUMI KATO — Parasitic Plastic Models

2022年11月6日[日]– 2023年3月12日[日]

休館日：月曜日[1/9は開館]、12/31-1/3　開館時間：11時より19時まで
入館料：大人 1,200 円 / 大人ペア 2,000 円 / 学生（25 歳以下）・高校生・70 歳以上の方・身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳お持ちの方、および介助者（1 名様まで）1,000 円 / 小・中学生 500 円

主催／会場：**ワタリウム美術館** 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 3-7-6
Tel:03-3402-3001　Fax:03-3405-7714
official@watarium.co.jp　http://www.watarium.co.jp
協力：Reborn-Art Festival 実行委員会

WATARI-UM
The Watari Museum of Contemporary Art

パリの版画工房「Idem Paris」では、
かつてピカソ、ゴッホ、シャガール、ミロなどの個展のポスターが刷られ、
いまでも当時のままあちこちに貼られている。
それらへのオマージュとして、この展覧会のポスターをイメージして制作した。— 加藤泉

「加藤泉ー寄生するプラモデル」展覧会限定スペシャル ポスターリトグラフ , 2022, 和紙にリトグラフ
36 × 39.5 cm(image: 24 × 29.5 cm) ed.240, photo by Kei Okano

新型コロナウイルスのパンデミックで展覧会が延期になったり中止になったりして、久々にスタジオでゆっくりプラモデルを作っていた。
ヤフオク！や eBay で調べていたら、動物や昆虫などのプラモデルを発見し、昔のプラモデルは面白いなーと思い、買いあさっていた。作っているうちに、これは作品に使えると思いだし、早速木彫にひっつけてみた。
これはいけると思い、どんどん作った。そうしているうちに、友人に「ゴモラキック」の神藤政勝さんを紹介された。彼はフィギュアやプラモデルを作っているメーカーの人だった。「何かやりたいですね！」と話をしているうちにすぐに「プラモデル、しかも石作品の！」と閃いた。
石がプラモデル。デカールが絵。
今までの僕の作品ともつながるグッドアイデアだと思う。
もちろん箱も僕が作るのだ。
素晴らしい。モチベーションは MAX だ。
そうしてプラモデルが完成し、この展覧会を開催することになりました。
プラモデルを使ったシリーズと、それらにつながる僕の作品を見てください。— 加藤泉

オリジナルプラスチックモデル　photo by Kei Okano

主な展示予定作品　（　）は予定展示数

無題 , 2022
木、プラモデル、ソフトビニール、アクリル絵具、ステンレススチール
164 × 40 × 85 cm, photo by Kei Okano

木彫作品：ビンテージプラモデルを木彫にコラージュしたシリーズ（4 点）

僕の作品の抽象的な人がたにリアルに作られた生きものを組み合わせることは、新鮮で面白かった。

なぜ面白いかはまだわからない。

時間が経てば理由がわかるだろう。— 加藤泉

その他　その 1　浮世絵の技法を用いた木版画
浮世絵は、独自の技法や素材により幅広い表現が可能である。ビンテージプラモデルの箱に施された細やかな描写の鳥の絵と僕の絵をコラージュした原画をもとに制作した。

その他　その 2　僕が参加しているアーティストバンド「THE TETORAPOTZ」と「HAKAIDERS」の LP レコードに使われたアートワーク

その他　その 3　フランス、ノルマンディー地方のル・アーヴル市のアートプロジェクトのために制作した、高さ 7m のブロンズ彫刻作品。プラモデルシリーズとして、周囲の緑と同化した巨人の人がた像とリアルなを蜂を組み合わせた作品。本展では、拡大した画像を壁面に貼り付ける。

— 加藤泉

無題、2020、ソフトビニール、プラモデル、木、ステンレススチール
22 × 8 × 5 cm、24.5 × 7 × 7 cm、22 × 6 × 5 cm、22 × 10 × 5 cm, photo by Kei Okano

小立体作品：木彫やソフトビニールなどとビンテージプラモデルをコラージュした小作品シリーズ（10 点）

ジオラマシリーズ：（１セット / ９点１セット）

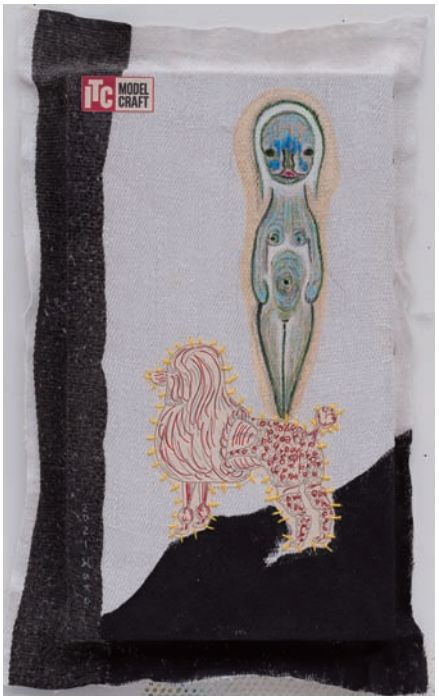
プラモデルの箱シリーズ（2 点）

プラモデルの購入意欲を掻き立てるのは、箱に描かれたイメージの絵である。

このシリーズは、「もし自分の作品がプラモデルになったとしたら、どんな箱をつくりたいか」を想像しながら、リトグラフやフィギュアを使って制作した箱から展開した平面作品だ。近年の僕の作品はすべてタイトルを「無題」にしているが、このプラモデルの箱シリーズは、実際に存在したプラモデルメーカーの箱のマークをコラージュし、そのメーカーへのオマージュとしてメーカー名を作品タイトルにした。— 加藤泉

組立説明書シリーズ（3 点）

プラモデルの組立説明書に描かれている絵は、誰が描いたかわからないが、とても魅力的である。これらは、プラモデルをコラージュした木彫作品と同様、組立説明書をコラージュし平面作品にしたシリーズ。　— 加藤泉



ITC, 2021
彫刻：プラモデル、木、石、アクリル絵具、ステンレススチール
布作品：布、プラモデル組立説明書、刺繍、コラージュ、ペン、パステル、アクリル絵具
Set of 2 works, Sculpture: 21 × 30 × 13 cm,
Fabric drawing: 40 × 26 cm,　photo by Kei Okano

立体と組立説明書シリーズのセット作品（２セット / ２点１セット）

プラモデルを使った木彫作品に合わせ、そのプラモデルの組立説明書を使って平面作品をつくったセット作品。プラモデルでは箱の絵のイメージ（二次元 ）と完成されたプラモデル（三次元）が重要になるが、同様に箱の絵の二次元的な平面表現と実際に完成された三次元としての立体表現を視覚化した。　— 加藤泉

ペインターとしての仕事（3点）

僕は1990年代の終わり頃から自覚的に絵画を描き始めた。子供が描くようなシンプルな記号的な顔のかたちからスタートし、現在に至るまで人がたを手がかりとして展開している。人がたは花や動物よりも一番モチベーションが上がる。なぜならば人のモチーフに対して鑑賞者は花や動物とは違い同じ人間として観るので厳しく観る。なのでより挑戦しがいがあるからだ。僕の仕事は絵画が中心であるため、立体作品は絵画の視点から制作している。— 加藤泉

石作品（約5点）

2015年、香港のスタジオの前の海岸で釣りをしている時に足元にあった多くの石を見たとき、作品にできるのではないかと思いついた。石は、それぞれ形、色、表面ととても個性があり、石自体に自然から得た沢山の情報が入っている。その素地に絵を描くことは、石と相談しながらコラボレーションしている感じである。また彫塑している訳ではないので彫刻というよりも絵画ともいえ彫刻なのか絵画なのかわからない立体作品である。その後、石と木彫作品を組み合わせたり、ブロンズやアルミに鋳造したりと展開している。
そして現在、今回のオリジナルのプラスチックモデルが誕生した。— 加藤泉

無題、2022　協力：Reborn-Art Festival 実行委員会
石、アクリル絵具、サイズ可変 (イメージサイズ：47 × 185 × 150 cm)

加藤さんとは 2022 年のリボーンアート・フェスティバル * への参加をお願いして、何度かお目にかかり、アトリエを訪ねているうちに、この「寄生するプラモデル」の開催となった。リボーンアート・フェスティバルのために作られたこの作品は、石巻近くで採れる稲井石を組んで、それに直接ペイントした「ヒトのような像」で、東日本大震災で最も大きな被害のあった南浜地区に唯一残った蔵の前に 3 体展示されていた。気持ちよさそうに横たわるその姿は、観るものをほっとさせ、生の喜びのようなものを感じさせる。
加藤さんの作品にはこの「ヒトのような像」が必ず登場する。精霊なのか、神なのか、縄文人のような古代人か、あるいは未来から来たものか。インタヴューで自身が島根県安来市の出身で、妖怪漫画で有名な水木しげるが中海を挟んだ対岸の鳥取県境港市の出身で同じ文化圏であることを話されていたが、加藤さんがそうした八百万の神と自然に囲まれて育ったことは作品に大きな影響を与えていると思う。だからといって加藤さんの作品は神がかったいわゆる“ありがたい”ものではない。今回の展覧会で使われる素材は、これまでの木や石といった自然素材に加えてプラスチック製のプラモデルやソフトビニールも登場する。加藤さんの少年期のノスタルジックな素材感からやってきたものだろう。今、加藤さんはそんな自身の育った場所や時間や潜在意識の中にある自然への思いなどを縦横無尽に取り込んで、のびのびと作品を作り続けている。
そんな現在の加藤さんの姿は、ワタリウム美術館がこれまで続けてきた美術との向き合い方とどこか通じるところがあり、同志の感のようなものを抱いた。自由や自然の力を見失いかけている 2022 年の東京で、加藤さんの作品を紹介できることをとても嬉しく思っている。

和多利浩一（ワタリウム美術館 代表） 本展カタログのためのテキストより

*2022 年 8 月 20 日〜10 月 2 日、宮城県石巻市で開催された芸術祭

関連企画

トークイベント開催

2022年11月26日(土) 石原正康(幻冬舎 専務取締役) ＋ 加藤泉
2022年12月17日(土) 神藤政勝(ゴモラキック 代表取締役社長) ＋ 加藤泉
2023年1月7日(土)　 神谷幸江(美術評論家) ＋ 加藤泉
時間：19:00- 20:30 ／ 会場：ワタリウム美術館
参加費：各回 1000円 ／ チケット販売：ArtStickerを予定

無題、2020
木、プラモデル、革、アクリル絵具、ステンレススチール、真鍮
33 × 15 × 32 cm、、photo by Kei Okano

展覧会カタログ

『加藤泉ー寄生するプラモデル』発売

加藤泉のオリジナルプラスチックモデル作品と
プラモデルシリーズ作品を総まとめしたレゾネ的なカタログを発売。
発売日：2022年11月5日予定
判型：A5横型・160ページ／ 価格：未定 ／ 発行：Potziland Records ／ 発売：幻冬舎

関連展示

加藤泉とTHE TETORAPOTZ

～Potziland Records Pop-up Store～

ソフトビニールフィギュア
制作：リンデン
©2022 Izumi Kato

加藤が設立した「Potziland Records」にフォーカスし、加藤が参加する仮面バンド"THE TETORAPOTZ"の活動と、メンバーである南隆雄、Mrs.Yukiによるアートワーク等を展示します。

会期：2022 年 11 月 5 日(土)～ 2023 年 1 月 15 日(日)
会場：ライトシード・ギャラリー(ワタリウム美術館 B1)
展示：加藤泉 ＋ THE TETORAPOTZ メンバー作品、Potziland Records がリリースしたプロダクトなど
販売アイテム：加藤泉のリトグラフ(限定販売／「Idem・Paris」にて制作／価格 税込 88,000 円)と
本展限定オリジナルカラー・ソフトビニールフィギュア(500 個限定販売)
＋ THE TETORAPOTZ 新作レコード他関連グッズ
お問合せ：オン・サンデーズ onsundays@watarium.co.jp

加藤泉

1969 年島根県生まれ。
1990年代末より画家として本格的にキャリアをスタート。子供が描くようなシンプルな記号的な顔のかたちに始まり、現在まで人がたを手がかりに展開している。
2000年代から木彫作品を発表し、現在は、ソフトビニール、石、布、プラモデルなど幅広い素材を使い制作している。主な個展として、Red Brick Art Museum (北 京、2018年)、Fundación Casa Wabi (プエルト・エスコンディード、メキシコ、2019年)、原美術館 / ハラ ミュージアム アーク(東京/群馬、2館同時開催、2019年)、SCAD Museum of Art (サバンナ、米国、2021年) など。

加藤泉　photo by Claire Dorn